

# 万年筆の旅

Vol. 26

令和7年旭日中綬章受章記念

津村節子氏特別インタビュー  
—小説家として書き続けた日々—



撮影：小澤忠恭

特別寄稿

吉村先生・津村先生と原稿用紙 川口昌洋

吉村昭ゆかりの地より資料紹介～いわき市立草野心平記念文学館～

『彰義隊』執筆における郷土史家との交流 渡邊彩

- 令和7年度企画展開催報告 「吉村昭と「文学者」」
- 関連イベント開催報告 朗読 神尾晋一郎が読む「私の文学漂流」「少女架刑」
- 令和7年度上映会開催報告 ドラマ「青春の昭和史(1) 遠い日の戦争」上映会
- おしどり文学館協定 荒川区・福井県合同展示開催報告
- 第28回トピック展示 「吉村昭と津村節子—戦時下で過ごした青春—」

# 津村節子氏特別インタビュー

— 小説家として書き続けた日々 —

津村節子氏(荒川区立ゆいの森あらかわ名誉館長)が、令和7年(2025)11月3日、旭日中綬章を受章されました。小説家としての歩みを振り返られ、心に残っている出来事や、吉村昭との思い出についてお話を伺いました。

97歳になる今日まで、書きたいことをひたすら書いてきたですから、「勲章をいただいてもいいのかしら?」と思いました。吉村も、びっくりしていると思います。

これまでを振り返り、印象に残っているのは、新婚当時の東北から北海道までの行商の旅です。根室までたどり着き、その先の駅はないと知った時、「さい果ての地にきたんだな」と思いました。



秋の勲章・褒章伝達式にて  
令和7年11月12日  
写真提供 吉村司氏



(左)吉村と津村氏 新婚の頃\*昭和29年  
生活のために始めた仕事で大量のセーター類を背負いこみ、販売のため行商の旅に出た。  
(右)「さい果て、昭和47年 筑摩書房  
表題作を含む5篇を連作としてまとめた。  
(\*は津村節子氏寄託資料)



(左)四国遍路巡礼の旅\*平成18年11月  
平成18年7月31日に吉村が膀胱がんにより死去。同年11月に遍路の旅に出た。  
(右)「遍路みち」平成22年 講談社  
全5篇の短篇集。表題作と「声」、川端康成文学賞受賞作の「異郷」はと村の死から、3年を経て実体験を基に執筆された。平成23年には長篇「紅梅」(文藝春秋)で菊池寛賞受賞。



津村氏と滝口学区長 令和7年12月13日  
第28回トビック展示を記念の際、当館エントランスで。

吉村は、見知らぬ土地へ行くのを楽しむところがありませんでしたが、私は、セーターを売らなければと必死でした。戸板に並べたセーターの上に雪が降り、それを見下ろせる宿の2階の部屋で、吉村は小説を書いていました。上野駅に、やっと戻って来た時には「もうこれで行商をしなくていいんだ」と安堵しましたよ。つらい旅でした。

その後も生活は大変でしたが、書くことは諦めませんでした。少女小説を書いて家計を支え、狭いアパートの筆筒の上に原稿を広げ、子供をおぶったまま、立って書いていました。

北海道の行商の旅を題材に短篇「さい果て」を書き、新潮社同人雑誌賞をいただいた。文壇にデビューできました。「転ん

でも、ただでは起きない」のよ(笑)。その後も書きたいことは、いくらでもありました。ただただ、書き続けました。

吉村は闘病中も「ちゃんとして仕事しているか?書け」と、私のことを気にかけていました。私がゲラを直していると安心するんです。

吉村の死を境に書けなくなり、「私もこれで終わりかな」と思いました。お遍路に行こうと決心して、四国八十八箇所霊場を巡りました。最愛の夫との別れに向き合い、編集者に励まされて、再び書き始めることができました。各社の編集者に「もういいかげん書いてください。書かないとだめです」と詰め寄られたんです。

あの時、執筆をやめていたら、この度の受賞はなかったと思います。編集者のおかげと、とても感謝しています。

吉村昭記念文学館の書齋を訪れると吉村が今でも、そこで椅子に座って、昔

## Profile 津村節子氏

昭和3年(1928)、福井市生まれ。昭和28年、学習院大学短期文学部文学科を卒業。同年、大学の文芸部で知り合った吉村昭と結婚。昭和40年、「玩具」で芥川賞を受賞し、以降、多くの文学賞を受賞。歴史・芸術・伝統産業など、さまざまな題材をもとに数多くの作品を発表し続けている。日本芸術院会員、文化功労者。荒川区功労者特別功労者、荒川区立ゆいの森あらかわ名誉館長、福井県ふるさと文学館特別館長。

【受賞歴】新潮社同人雑誌賞、芥川賞、女流文学賞、芸術選奨文部大臣賞、川端康成文学賞、菊池寛賞、福井県県民賞、恩賜賞・日本芸術院賞、勲四等宝冠章、紺綬褒章、旭日中綬章

## おしどり文学館協定 荒川区・福井県合同展示 吉村昭と津村節子 — 戦時下で過ごした青春 —

会期：令和7年10月17日(金)

12月17日(水)

平成29年(2017)11月5日に、当館と福井県ふるさと文学館は「おしどり文学館協定」を締結しました。吉村昭と福井県出身の津村節子氏が、文壇の「おしどり夫婦」として知られることにちなみ、文学館同士の連携事業を行っています。今回は、太平洋戦争の終結から80年、荒川区平和都市宣言から30年を経て、昭和2年(1927)生まれの吉村と、同3年生まれ津村が、多感な時期に戦時下で、どのような体験をしたのかを、自筆原稿や写真、関連



(左)吉村昭 私立東京開成中学校の制服を着て14歳~15歳の頃\*昭和16年~17年頃  
(右)北原(津村)節子 東京府立第五高等女学校の制服を着て16歳の頃\*昭和19年  
太平洋戦争が終結した昭和20年、吉村は18歳、津村は17歳だった。

作品など全30点の資料を通して紹介しました。併せて、対談映像「吉村昭氏・澤野孝二氏対談—東京初空襲の体験を語る—(荒川区平成17年7月30日収録)や、記録映像「東京の占領 昭和20年—(昭和館蔵)」を放映しました。戦争の記憶を継承し、伝え続けることの大切さを、改めて考える機会としました。(\*は津村節子氏寄託資料)

### 吉村昭の空襲体験と肉親の死

昭和17年4月18日、自宅(現在の東京都荒川区東日暮里6丁目)の物干し台で、風揚げをしていた吉村は、東京初空襲で飛来した米軍機B25を目撃しました。また、同20年3月10日の東京大空襲から数日後、荒川放水路と隅田川に架かる尾竹橋の上から、「大きな筏のように」固まった死体を見ました。「死と隣り合わせに生きていた」ためか「なんの感慨もなく」見下ろしていたと記しています(尾竹橋)。このような戦時下の体験を、澤野孝二画「風揚げをする吉村昭とアメリカ軍のドーリットル機(当館蔵)や、自筆原稿「空襲のこと(後)」\*、「東京の戦争」所収)、白筆原稿「尾竹橋」\*、「わたしの流儀」所収)の推敲箇所をたどり、紹介しました。

吉村は、同20年4月13日の夜間空襲で自宅が焼失すると、現在の千葉県浦安市で、木造船工場を経営する長兄の家に寄宿し、造船所の仕事に従事しました。この頃の体験を題材とした自筆原稿(草稿)「月夜の炎」\*、「再婚」所収)や、戦時下の東京下町で生きるロシア人一家の姿を描いた自筆原稿「虹」\*、「炎」\*のなかの休暇「所収」を初公開しました。さらに、五兄敬吾の戦死や、終戦の前年に母きよじを、終戦の年に父隆策を亡くした体験を写真や、関連作品の記述と共に紹介しました。

### 津村節子の自伝的長篇「茜色の戦記」

津村は9歳で母とよを亡くし、2年後の昭和14年、故郷の福井から祖母、姉と共に東京へ転居しました。同年には、単身、福井で暮らしていた父芳司が急死し、家族は深い悲しみに襲われますが、姉、妹と力を合わせ、戦中・戦後の困難を乗り越えました。

自伝的長篇「茜色の戦記」(平成5年新潮社)では、勤労奉仕や学徒動員を体験した女学校時代を中心に、戦時下で過ごした青春を描いています。取材した大勢の同期生の証言を、主要人物に集約し「私たちみんなの戦争」(あとがき)を描き出しました。

今回は、白筆原稿「茜色の戦記」(複製 当館蔵、原資料 福井県ふるさと文学館蔵)をはじめ、創作ノート「茜色の戦記」(写真提供 福井県ふるさと文学館)の書き込みと、貼付された参考資料、女学校時代の津村の写真などを展示し、戦時下の世相と、津村の実体験を紹介しました。

関連事業開催報告  
福井県ふるさと文学館 特集展示  
協定を締結する福井県ふるさと文学館では、令和7年9月30日(火)~12月17日(水)まで、特集展示「昭和100年津村節子と吉村昭」を開催しました。お二人の出身地や昭和を代表する作品を紹介しました。

### 吉村昭記念文学館オンライン解説

日時：令和7年11月9日(日)  
11時~11時半  
当館と、福井県ふるさと文学館主催「文学フェスタ2025」の会場をオンラインで繋ぎ、今回の展示資料を1点ずつ画像で紹介し、解説しました。20代から70代の方まで、幅広い世代の方々に参加いただきました。

### 両館で記念グッズを配布しました

当館では、津村氏の長篇「茜色の戦記」をイメージしたデザインを活版で印刷し、文庫用のブックカバーを製作しました。福井県ふるさと文学館では、吉村と津村氏の往復書簡の一節を掲載したクリアファイルを製作しました。



上吹会(p7掲載)で配布しました。

(学芸員 深見美希)

# 吉村昭と「文学者」

会期：令和7年8月9日(土)～

10月3日(金)

「文学者」は、小説家丹羽文雄が中心となって発行した同人雑誌です。

昭和28年(1953)に津村節子と結婚した吉村昭は、同人雑誌に作品を発表しながら会社で働き、小説家として身を立てることを目指していました。いくつかの同人雑誌への参加を繰り返す中で、「文学者」に惹かれ、月例会へ参加し、入会を決めます。津村とともに執筆に励み、丹羽文雄、石川利光、小田仁二郎、瀬戸内寂聴をはじめ多くの小説家と出会いました。

今回の展示では、当時の吉村にとって支えとなった「文学者」について、掲載紙や新聞雑誌などを通して振り返りました。また、「文学者」を通じて出会った交流を深めた小説家をはじめ、親交のあった小説家の関連資料や、吉村・津村との手紙なども紹介しました。

気持ちが届くこともなく  
小説をかきつけてこられたのは、  
「文学者」が  
この世に存在していたから

吉村昭「最後の編集」  
(「文学者」第17巻第4号 昭和49年4月)



ポスター



HPにて展示室  
公開中!!

## 第1章 丹波文雄と「文学者」

昭和23年に世界文化社より刊行された「文学者」は、翌年休刊しました。それを惜しんだ丹羽を中核として、同25年に復刊(第1次)されます。その後、同30年に第64号で一時休刊し、同33年4月に丹羽が発行経費を全額負担する形で復刊(第2次)。復刊第1次からの通巻第256号まで続きました。

第1章では、武蔵野大学図書館及び四日市市立博物館の協力のもと、256冊の「文学者」を全て展示しました。また、丹羽の自筆原稿「處女作集」(鮎(四日市市立博物館蔵)や石川の白筆原稿「春の草」(日本近代文学館蔵)、手紙、書籍などゆかりの資料を、吉村・津村との写真とともに紹介しました。

さらに中野区立中央図書館より、「文学者」の月例会がよく開催されていた東中野のレストラン「モナミ」に関する写真や地図などのデータを借用し展示しました。

## 第2章 「文学者」の休刊と同人雑誌「Z」

「文学者」が第64号をもって休刊した時、同人であった小田から、自身の主

催する同人雑誌「Z」に誘われ、吉村は津村と参加します。瀬戸内晴美(後の寂聴)も同じように誘われて参加していました。

第2章では、「Z」や小田の追悼誌として瀬戸内が編集・発行した「J・I・N」(徳島県立文学書道館蔵)などの同人雑誌をはじめ、瀬戸内の執筆道具や、津村と参加していた少女向けの小説雑誌、津村宛のFAX原稿を紹介しました。

その他にも瀬戸内が吉村との交友を振り返った白筆原稿「奇縁まんだら」吉村昭(徳島県立文学書道館蔵)と、関連する横尾忠則の画「吉村昭」「瀬戸内寂聴」(写真提供ヨコオズ・サーカス)を展示室内に掲示しました。

## 第3章 吉村昭と「文学者」

「文学者」第60号には初めて吉村の短篇「青い骨」が掲載されました。復刊後には、発表された「鉄橋」「透明標本」が「貝殻」「石の微笑」と合わせて計4回芥川賞候補になります。一方、昭和36年からは編集委員となり、「文学者」を支えました。多くの原稿を目にする中で、人間の個性のように、小説を読む眼も異なるため、「自ら充足感をおぼえるような小説を今後も書いてゆけてください」との「だ」と改めて考えるようになりました。

第3章では、吉村作品の「文学者」掲載誌を中心に取り上げるとともに、自費出版した初の単行本「青い骨」出版時や太宰治賞受賞時に、開かれた記念会の芳名録など、「文学者」の仲間の存在が伝わるような資料も紹介しました。さらに、吉村が最初に「文学者」を手にとった紀伊國屋書店からは、当時の店舗の写真も借用しました。

また津村にとっても「文学者」の存在は大きく、展示では「さい果て」で同人として新潮社同人雑誌賞を受賞したことや、その翌年に「玩具」で芥川賞を受賞したことなどを、当時の写真や新聞のスクラップブック、雑誌を通して振り返りました。

加えて、吉村・津村の文学修業時代を支えた人物である吉行淳之介についても、吉村の自筆原稿や、津村の「風紋」を吉行が取り上げた雑誌の記事などとともに紹介しました。

展示の最後には、「文学者」の関係者が愛用した「満寿屋の原稿用紙」について取り上げ、丹羽の書や丹羽・瀬戸内の名前入り原稿用紙(共に外屋蔵)を借用し展示しました。

お客さまからは、「同人時代、夫婦で作品執筆に励んでいる姿が想像できる展示だった」といったお声や「作家としての軌跡、他の文学者との関わりなど、新たに知ることができた」などのお声をいただきました。

(学芸員 北山ゆかり)

### 展示図録のご案内

同人雑誌「文学者」を通じて出会った丹羽、石川、小田、瀬戸内と吉村、津村の関連資料を紹介しています。

- 価格 330円(税込)
- 規格 B5型、48ページ、オールカラー
- 販売場所 ゆいの森あらかわ1階総合カウンター ※郵送販売も承ります。詳細はHPまたはお問い合わせください

#### 【特別寄稿】

吉村司氏(吉村昭・津村節子氏長男)  
勝又浩氏(文芸評論家)

## 関連イベント

### 朗読

### ●朗読

### 「私の文学漂流」「少女架刑」

出演 神尾晋一郎氏(声優)

日時 令和7年9月28日(日)

14時〜15時30分

声優として数々の作品に出演されている神尾晋一郎氏をゆいの森ホールにお招きしました。同人雑誌「文学者」とゆかりの深い二つの作品を朗読いただきました。

最初にお読みいただいた「少女架刑」は、亡くなった少女の視点で、自身が解剖されていく様子を描いた短篇小説です。昭和34年(1959)、「文学者」に掲載され、4年後に出版社より初めての短篇集が発行された際には、その表題作として収録された作品です。

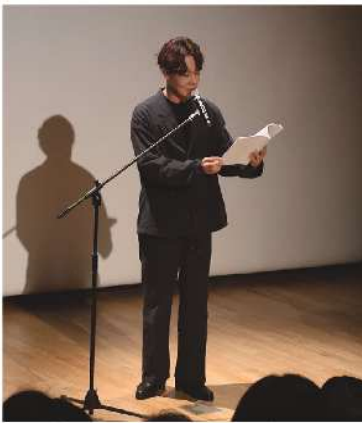
次に「私の文学漂流」をお読みいただきました。この作品は、現在の荒川区東日暮里に生まれた吉村が、小説家を目指し、逆境を乗り越えながら、太宰治賞を受賞し、「戦艦武蔵」が生まれるまでの軌跡を、率直に綴った自伝的随筆です。その中から、「文学者」や「Z」が登場する「第四章 同人雑誌と質店」を朗読していただきました。

神尾氏は細やかに登場人物を演じ分けておられ、一人一人が浮かび上がってくるような朗読に、参加者は終始引き込まれていました。

朗読後のトークでは、今回初めて「少女架刑」を読んだことや、朗読にあたっては冒頭の一文にある「霧が一時に晴れ渡ったような」という表現を大切にしかかったこと、「私の文学漂流」を読みながら、自身と吉村の経歴が一部重なると感じたという点についてもお話しくささいました。台本を何度も読み込んで当日を迎えてくださったそうです。

その他にも、読書歴や、今後演じてみたい役なども伺い、「誰かの人生を生みたい時から」演じてみたいとお答えいただきました。最後に皆さまへのメッセージとして、吉村作品の中で一番お好きな「冬の鷹」を挙げて、調査に基づく細かな描写に、その魅力を感じておられることをお話しくささいました。

当日参加された皆さまからは「朗読の迫力と、少女架刑の表現の迫力」を楽しんだといったお声や、「本を読んでみたい」と思ったというたくさんの感想をいただきました。



満員のホールで朗読中の神尾氏

### ●ワークショップ

### インクと紙と万年筆のひみつ

吉村昭が愛用した道具を科学で探ろう！  
日時：令和7年8月30日(土)  
14時30分〜15時30分



ガリ版印刷の体験をしている小学3年生から6年生



企画展に関連して、吉村が愛用した万年筆の仕組みや、インク、紙の歴史や構造について学ぶワークショップを開催しました。また、ガリ版印刷による印刷体験も実施しました。

ワークショップの後半では、常設展示室や企画展示室も巡りました。文学館にある吉村の愛用した万年筆や原稿用紙と、企画展で展示している様々な小説家のものごとを比較しました。

特に、原稿用紙は、丹羽が使用していたことから、吉村、津村、瀬戸内が同じ「満寿屋の原稿用紙」を使っていたため、関心が集まりました。

当日はたくさんのお小生の参加があり、ガリ版印刷に苦戦しながらも集中して挑戦する様子やパピルスに興味深く観察する様子などが見られました。

### 学芸員ノート

四日市市立博物館の丹羽文雄記念室では、武蔵野市の丹羽邸の玄関などが再現されています。

当時「文学者」の関係者が集った丹羽邸の新年会には、吉村・津村も参加していました。当館には、昭和37年に玄関前で撮った二人の写真が残っています(写真左)。

ぜひ四日市市立博物館にお越しの際は、再現された玄関前で二人のように外側をゆっくり見回してみたいかがでしょうか。記念室では玄関前に丹羽の等身パネルが設置してあり、出迎えてくれます。



丹羽文雄記念室に再現された玄関写真提供 四日市市立博物館



丹羽邸の新年会に出席する吉村と津村 昭和37年 津村節子氏寄託資料



荒川区公式  
YouTubeにて配信!!  
令和8年9月27日まで

# 吉村先生・津村先生と原稿用紙

川口 昌洋

吉村先生、津村先生とも関わりの深い丹羽文雄先生からのご依頼で弊社の原稿用紙作りは始まりました。創業明治十五年の弊社はもともと贈答用の砂糖の化粧袋などを中心とした包装資材を扱う紙店で、原稿用紙との関わりはありませんでした。昭和に入り、時代は戦争へと向かう中で紙を含めたあらゆる物資が統制になり、丹羽先生をはじめとした作家諸先生方は原稿用紙がなかなか手に入らず頭を悩ませていたと聞いています。そんな時、当時女学校を卒業したばかりの、私の祖母で三代目の川口ヒロが、文学仲間が集まる早稲田の喫茶店で丹羽先生から「君のところは紙屋だろう。何とかしてくれないか」と言われたそうです。弊社には業務上、質の良いカラフト産パルプによる紙の在庫があり、原稿用紙を生産することが可能でした。

ただ紙があっても、それまで関わったことのない原稿用紙作りは簡単なことではありませんでした。執筆に適した紙、先生のお好みの罫線の形状と色など、試行錯誤しながらお作りしたそうです。以来、丹羽先生はずっと満寿屋(弊社のブランド名)の原稿用紙をご愛用くださいました。文壇に多くのお仲間やお弟子さんのいらした丹羽先生の

ご紹介もあって、当時の先生方の中で評判となり、たくさんの方から原稿用紙のご注文をいただくようになりました。吉村先生、津村先生もその流れで弊社をお使いになるようになったのです。

実を申しますと、五代目である私は吉村先生に直接お目にかかったことがありません(津村先生は一度講演会に伺ったことがあるのですが)。吉村先生、津村先生には、祖母が大変お世話になりました。私の母によると、祖母は度々吉村先生に電話をかけ、他愛のない内容で長話にお付き合っていたようで、いつも母は隣でハラハラしていたと

言っていました。祖母は早稲田の喫茶店へ自ら丹羽先生に会いに押しかけるような物怖じしない性格でしたので、おそらく吉村先生に頼っていたのだでしょう。先生の人間性をとても尊敬していたようです。津村先生は何度か弊社にお越しになり、同じく祖母の話し相手になっ

てくださいました。二〇〇八年に亡くなった祖母からはお二人についてのエピソードをもう聞くことはできませんが、心血を注いだ原稿用紙をずっとお二人にご愛用いただけたことは何よりも嬉しかったに違いありません。

丹羽先生は美濃判・ルビ有り・グリーン野のNo.33、吉村先生と津村先生はともにB4判、ルビ無し・グリーン野のNo.21という原稿用紙をご愛用でした。吉村昭記念文学館では、昨年の「吉村昭と「文学者」」という企画展オリジナルグッズとして、No.21の原稿用紙を本文のモチーフとしたノートと一筆箋に作りました。また同じくNo.21をモチーフとした一筆箋、メモ帳なども販売しています。小説を書くための道具としてだけでなく、吉村先生が亡くなられてからもこのような形で関わらせていただけることを心より感謝しております。(かわぐち・まさひろ 外屋代表取締役社長)



丹羽文雄自筆  
「満寿屋の原稿用紙」

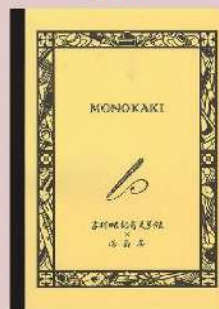
写真提供 外屋

浅草の店舗に飾られている丹羽文雄の書。縦書きと横書きの書は、原稿用紙に付す短冊に使用されている。

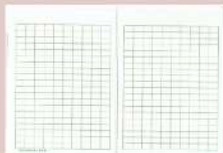
グッズ

吉村昭記念文学館  
× 満寿屋

● オリジナルノート葉付き(550円)



表紙

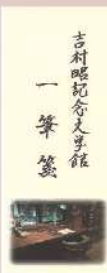


吉村昭愛用の原稿用紙をイメージしたノート部分



葉

● 一筆箋(150円)



● Xメモ帳(150円)



※販売場所につきましてはP4の「展示図録のご案内」を参照ください。価格は全て税込です。

企画展「吉村昭と「文学者」」を記念して、ノートを製作しました。丹羽文雄の書が記載された通常原稿用紙に付す短冊を、今回は葉として使用しました。葉のもう一方には、津村氏のエッセイより原稿用紙に関する一文を印刷しています。

吉村昭ゆかりの地より資料紹介〜いわき市立草野心平記念文学館〜

# 『彰義隊』執筆における郷土史家との交流

渡邊 彩

令和7年度上映会開催報告  
ドラマ「青春の昭和史(1)  
遠い日の戦争」上映会  
日時・令和7年10月25日(土)  
14時〜16時

詩人・草野心平(1903〜1988)の故郷、福島県いわき市にある、市立草野心平記念文学館では、令和7年(2025)夏に津村節子様をはじめ吉村昭氏ご遺族、吉村昭記念文学館よりご教示とご協力を賜り、企画展「吉村昭と磐城平城」を開催しました【写真1】。本展は吉村作品の魅力を発信する「吉村昭の生涯と作品」と、歴史小説『彰義隊』執筆における吉村といわきの郷土史家との交流などを紹介する「吉村昭と磐城平城」の2部構成としました。

吉村は、上野寛永寺の山主だった輪王寺宮を主人公に「戊辰戦争を描いた『彰義隊』(平成17年(2005)朝日新聞社)で、江戸を離れた宮が平潟に上陸後、いわきから会津へ向かう行程や、磐城平城が朝廷軍の総攻撃を受けて落城する様子を描いています。



【写真1】企画展ポスター

吉村は取材のために2度いわきを訪れ、郷土史家の小野一雄氏らが案内し、資料を提供しました。最初の来訪は平成14年(2002)9月で、地元の古書店や磐城平城跡を訪ねました【写真2】。翌年7月には、輪王寺宮一行が通った磐城平城下の道筋をたどり、宮が宿泊した家の門前で、吉村は感慨深い面持ちでしばし立ち尽くしていたといえます。

小野氏より提供された資料には、宮が通過した村々や護衛の様子、磐城平藩前々藩主・安藤信正の拜謁や宮一行への献上品などの記録があり、作品に反映されています。『彰義隊』の新聞連載開始後も吉村の照会に応じるなど2人の交流は続き、連載中に小野氏から指摘を受けた箇所が単行本刊行時には修正されており、作品に向き合う吉村の姿勢がうかがえます。

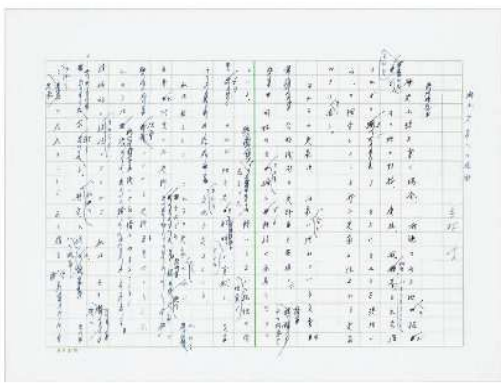


【写真2】磐城平城跡にて  
右から吉村昭氏、小野一雄氏。  
平成14年9月27日  
写真提供 小野一雄氏

史家の協力を得ました。彼の死後に発見・発表されたエッセイ「郷土史家への感謝」(『小説新潮』平成19年(2007)4月、新潮社)には、「私の歴史小説の執筆は、かれら史家の存在なくしてあり得ない」「これらの方々にあらためて感謝の意を表する」と綴られ、いわきを案内した小野氏、佐藤孝徳氏、安濃廣美氏の名も記されています。

本展開催に際し、ご教示およびご協力をいただきました関係者の方々に深く御礼申し上げます。

(わたなべ・あや いわき市立草野心平記念文学館主任学芸員)



自筆原稿「郷土史家への感謝」1枚目  
吉村昭記念文学館蔵(津村節子氏寄託資料)

荒川区平和都市宣言30周年・戦後80年あたり、ドラマ「青春の昭和史(1) 遠い日の戦争」を上映しました。

本作品は、昭和54年(1979)9月3日、テレビ朝日で放送されたテレビドラマ番組で、原作は吉村昭の『遠い日の戦争』(昭和53年 新潮社)です。

父親が戦犯だったと知り、家を飛び出した息子と、口を閉ざす父。親子の関わりを通して、それぞれの戦後を描いています。

参加者の方からは、「時代を知る機会があり、良かったです」とのご感想をいただきました。



「遠い日の戦争」上映会の様子



## 今号の表紙 Vol.26

今号の表紙は、令和7年秋に旭日中綬章を受章された津村節子氏のお写真です。

写真は小澤忠恭氏(写真家)が、昭和60年(1985)10月に三鷹の書齋で撮影されたものです。当時、津村氏は吉村と夫婦作家として広く知られ、調査のために全国各地に取材旅行に出かけては、精力的に作品を発表していました。

巻頭頁のインタビューで、津村氏は「書きたいことを、ひたすら書いてきただけ」「書きたいことは、いくらでもありました。ただただ、書き続けました」と語っています。この機会に、津村氏の作家人生を見つめなおし、改めてその作品に触れてみてはいかがでしょうか。

撮影：小澤忠恭



## 「吉村昭記念文学館友の会 会員募集」

友の会会員を募集しています。  
限定グッズや各企画展の図録、各種イベントの優先募集のご案内をお送りいたします。ぜひ、ご入会ください！

### 【会員区分】

個人会員(1年) .....	1,000円
個人会員(3年) .....	2,500円
法人会員 .....	3,000円
賛助会員 .....	1口2,000円から



詳しくはHPをチェック！

毎年好評！卓上カレンダーをプレゼント♪



## 編集後記

★巻頭では、令和7年秋、旭日中綬章を受章された津村節子氏のインタビューをご紹介します。昭和3年、福井市生まれの津村氏は、戦中・戦後の困難を乗り越え、昭和26年に学習院大学短期大学部に入学し、短大文芸部の雑誌「はまゆふ」を創刊しました。同時に学習院大学の文芸部にも参加し、吉村昭と出会いました。在学中、吉村へ送った手紙に、小説を書くことを「いのちをかける仕事、情熱を注げる仕事」と綴った津村氏。インタビューのお話からは、初志を貫き、ひたむきに書き続けてきた小説家としての姿勢と歳月の重み、吉村昭への深い愛情が、ひしひしと伝わってきました。

★令和7年夏の企画展「吉村昭と「文学者」」には、猛暑の中、全国各地から多くの方が、ご来場下さいました。ありがとう

ございました (p4～p5 掲載)。同展に関連し、川口昌洋氏(外屋代表取締役社長)より、吉村と津村氏が愛用した原稿用紙にまつわる貴重なエピソードを寄稿いただきました (p6 掲載)。

★令和7年夏に、いわき市立草野心平記念文学館で開催された企画展「吉村昭と磐城平城」の展示資料について、同館の渡邊彩主任学芸員より寄稿いただきました (p7 掲載)。企画展では、いわき市の郷土史家・小野一雄氏が、吉村に提供した資料をはじめ、当館所蔵資料を多数、展示いただきました。また『吉村昭と津村節子 波瀾万丈おしどり夫婦』(令和5年 新潮社)の著者・谷口桂子氏の講演会も開催され、会期中、多くの方が来場されたそうです。ぜひ、歴史長篇「彰義隊」の取材地・福島県いわき市と、いわき市立草野心平記念文学館を訪れてみてはいかがでしょうか。

★令和8年度も、当館の活動にご期待ください！皆さまのご来館をお待ちしています。



※イベント等の最新スケジュールは当館ホームページからご確認ください。

## 吉村昭記念文学館ニュース 万年筆の旅 Vol.26

令和8年3月25日発行

■ 編集・発行/荒川区 登録番号(07)0077号

■ 問合せ/吉村昭記念文学館

〒116-0002 東京都荒川区荒川2-50-1ゆいの森あらかわ内

TEL : 03-3891-4352

FAX : 03-3802-4350

【開館時間】9時～20時30分 【入館料】無料

【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他

【題字】津村節子氏

### アクセス

- ・ 都電荒川線「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車 徒歩7分
- ・ 東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車 徒歩8分
- ・ 「コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
- ・ 東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)

